

Re:Monster

暗黒大陸編
THE DARK CONTINENT

リ・モンスター

1

金斬兎狐

セイ治

守りと癒しに優れ、
ある種のカリスマ性を持つ。

種族 セイリーネスキング
聖輝鬼王・亜種

クギ芽

全てを見通す九つの
目を持つ。情報収集能力に
かけてはオバ朗以上。

種族 くき おに ひめ
九祇鬼姫・亜種

アイ腐

あらゆるものを腐らせる力を持つ。
常に“趣味”の布教を欠かさない。

種族 アイディハイド ニュセス
腐死鬼姫・新種

ブラ里

血と剣を自在に操る戦闘狂。
スベ星とは特別に仲が良い。

種族 ブラッディドエンプレス
血剣軍女帝・亜種

スベ星

こと魔術の行使に関しては
《戦に備えよ》随一の腕を持つ。

種族 スベリティタンクイーン
煌魔星女王・亜種

ミノ吉

オバ朗の親友にして
良きライバル。超重量級の
身体と武具により、
圧倒的な実力を誇る。

種族 キガミノテリオス
雷牛帝王・超越種

アス江

オバ朗を超える巨体の持ち主で、
地と雷を自在に操る。
ミノ吉とは恋人同士。

種族 アスミールラージュ
地獄閻鬼・亜種

カナ美

オバ朗と共に生まれ育った
仲間にして正妻。
氷と血を操る力に関して
並ぶ者はいない。

種族 アスラッドローグンバア
氷血真祖・超越種

オバ朗

ゴブリンとして異世界に転生
した主人公。喰えば喰うほど
強くなる【喰喰能力】で進化を
繰り返し、傭兵団《戦に備えよ》を
率いて新天地へと進出する。

種族 グラジエラヤクシャオーバーロード
金剛夜叉鬼神・現神種

【オバ朗の妻達】

◆赤髪ショート

赤髪がトレードマークの元冒険者。
主力の八鬼に続く戦闘力を誇る。

◆鍛冶師さん

ほんわかとした雰囲気を持つ癒し系。
武具作りはドワーフ級の腕前。

◆姉妹さん（姉）

並々ならぬ料理センスを持つ。
巨乳で右目にほくろがある。

◆姉妹さん（妹）

並々ならぬ料理センスを持つ。
貧乳で左目にほくろがある。

◆錬金術師さん

知的なクール系美人。
マジックアイテム製作に定評がある。

【オバ朗の子供達】

◆オーロ

姉妹さん（姉）との間に生まれた、
第一子の長女。【魔砲】を武器に戦う
ロード・ミックスブラッド・バリアント
【半人武鬼・亜種】。

◆アルジェント

姉妹さん（妹）との間に生まれた、
第二子の長男。槍と弓を得意とする
ロード・ミックスブラッド・バリアント
【半人武鬼・亜種】。

◆鬼若

鍛冶師さんとの間に生まれた、第三子の
次男。近接戦闘に優れた【獄卒暴鬼】
ごくそつあばれおに
で、ミノ吉を深く尊敬している。

◆ニコラ

錬金術師さんとの間に生まれた、第四
子の次女。人間なのでまだ赤ん坊。

◆オブシー

赤髪ショートとの間に生まれた、第五
子の三女。【使徒鬼・亜種】なので成
アポストルロード・バリアント
長は早い、まだまだ幼児。

その他

◆鈍鉄騎士
どんてつ き し

【英勇】に勝るとも劣らない実力を持つ、
傭兵団「戦に備えよ」の主力メン
バー。

◆陽勇
ようゆう

かつて「復讐者」と呼ばれていた【陽
光の勇者】。復讐を遂げさせてくれた
オバ朗に、自らの《副要人物》達と
サブキャスト
共に付き従う。

◆飯勇
めしゆう

【聖戦】でオバ朗に負けた【料理の
勇者】。料理の腕を見込まれ、自らの
サブキャスト
《副要人物》達と共にスカウトされた。

《二日目》

どういう理屈かは不明だが、俺がこの世界に小鬼として転生して、一年と数日が過ぎた。
何度か名前が変わり、今はオバ朗と名乗る鬼生は、思い返せば色々濃密な日々であり、しかし
あつという間だった気がする。

戦って、敵を喰って強くなり、更に戦って敵を喰って強くなった激動の日々。今では、俺は
【金剛夜叉鬼神・現神種】にまで【存在進化】し、【世界の宿敵】なんて危険存在扱いもされた。
そして、【聖戦】という、俺率いる傭兵団《戦に備えよ》と各国の【救聖】や【帝王】、【英勇】
といった巨大戦力がぶつかり合う大規模な戦争を終えた現在。俺と仲間達が生まれた大陸は、大き
く変動しようとしていた。

この世界における戦略兵器ともいうべき存在達を、かなりの数、俺達が狩ったのだ。生き残りは
僅かしかおらず、そうなればこれまでのような国家関係でいられるはずもない。

これからは色々不穏な状況にあり続けると予想される中、俺達はこれもいい機会だと、しばらく

くほとぼりを冷ます意味を兼ねて、新大陸に行く事にした。

環境の違いから、新大陸にはこれまで喰った事のない獲物が溢れている。

こうしたまだ見ぬ美味なる食材も新大陸まで行く大きな理由だが、生まれた大陸には無い新しい国家やそこで育まれた文化、そしてそこに在る【神代ダンジョン】の攻略なども、重要な目的だ。攻略する事で得られる能力や財宝の数々は今後、絶対に役に立つ。

実は俺は、いつか前世のように宇宙にまで行つてみたいと思っている。その為にはまず、この世界をもっと知る必要がある。

生まれた大陸では今も、俺の能力で生み出した分体によってだけでなく、残った団員達も様々な形で情報を収集中だ。遠方の国家まで影響力を及ぼせるように商売の販路を広げているし、旅人として放浪する団員も居る。

これから、情報は何より必要だろう。そして、新大陸という支援の目途がまだ立っていない危険性の高い土地に、俺達幹部一同が向かうのは当然だ。

決して美味なる食材の誘惑に負けた訳ではない、とここに宣言しつつ。
さて、今日も記録を綴ろう。



【アンブラッセム・パラベラム号】に乗って、早一日が過ぎた。

現状、俺達の初航海は非常に順調に進んでいる。

まあ、乗っている船が船なので、ある意味当然だろう。【アンブラッセム・パラベラム号】はその大きさから、あるいはそれ自体【神代ダンジョン】であるが故に、大小様々な海洋モンスターに襲われる事がない。大型の武装船舶でも容易に沈没するような危険な特殊海域だろうと、問題なく航行できる。

それに、以前よりも上位種の「黒海征服す大提督」となった鯨頭獣人系ダンジョンボス——黒鯨提督が最短航路を選んで操舵してくれるので、俺達はただ乗っているだけでいい。

これで何か問題があるなら、この世界では航海などできるはずもないだろう。

大海には巨大モンスターや特殊海域が存在するので、命懸けの危険な旅である事を忘れてはならないのはともかく、そんな訳で俺達は問題なく航海を続けていた。

迷宮都市《ドウル・ガ・ヴァライア》を出港してからしばらくの間は、点在する小島などが見られたものの、そのうち水平線の彼方までただただ青い大海が広がるだけになる。

特徴的な特殊海域が多数あればそれはそれで楽しめたのかもしれないが、大渦が密集していたくらいで、それ以降はしばらく代わり映えのしない平穏な景色が続いた。

そうなると特に甲板にいる意味も無く、船内に引っ込んだ。

ただの船舶なら、カードゲームでもして過ごすところだろう。しかし、豪華客船型の【神代ダン

ジョン】である【アンブラッセム・パラベラム号】は、娯楽の面でも非常に優秀だ。船旅で暇になる、なんて事はない。

船内には何も知らず攻略に來た俺達と無関係な冒険者も居るので、彼らと遭遇しないように隔壁を下ろした区画にて、俺達はカジノやプールといった様々な施設を有効活用していく。

子供達や赤髪シヨートはカジノでゲームに興じ、ミノ吉くんとブラ里さんは船内のダンジョンモンスターを相手に実戦経験を積み重ねる。

アス江ちゃんは採掘した宝石類を鍛冶師さんと一緒に加工し、スペ星さんは積み上げた魔術書^{マジックブック}を読み耽る。

そしてセイ治くんは自主訓練で怪我をした鈍鉄騎士^{デュラン}や陽勇^{ようゆう}の治療を行うなど、それぞれ忙しそうである。

ただ、アイ腐^ふちゃんが率いる一部の同好の士達が、狂気に満ちた笑みを零しながら筆を走らせ、妄想を具現化した腐界を産み出していたのには、触れないように気をつけねばと思う。

ともあれ、新大陸に渡るまでの数日間、新しく造った訓練場にて朝の訓練だけは怠らず、午後はそれぞれ好きに過ごしてもらう予定なので、皆思い思いに自由な時間を謳歌^{おうか}するのであった。

そういう俺も、時々最上階にある広いプールで泳ぐくらいで、基本的にはサングラスとサーフタipesの海パン姿で陽を浴びていた。

といっても、既に黒い肌をしているし、そもそも肉体が強すぎて長時間太陽の下にいても肌が焼

ける事はないので、日焼け目的でこうしている訳ではない。

この辺りは気温が徐々に上昇していくに伴い日差しが強くなっているので、こうしておくのアビリティ【炎熱吸収】によって取り込んだエネルギーで身体の調子が非常に良くなるのである。

細胞の活性化、と言うのだろうか。これまでの戦闘で蓄積された深部の微細なダメージが癒やされるような、何とも言えない心地よい感覚がある。俺が生まれた《クーデルン大森林》にある拠点の温泉で【炎熱吸収】を使うのは効力が強すぎて危険だったが、夏並みの陽光は丁度いい強さらしい。

そんな感じでリフレッシュしている俺の隣には、思わず見惚れるほど美しい水着姿のカナ美ちゃんや、あまり肌を見せない普段の服とのギャップが凄い水着姿の錬金術師さんなどが居る。

俺とは逆に日焼け止めの魔法薬を塗り、同じく水着姿の姉妹さん達が作ってくれたジュースを飲みながら日陰で優雅に寛ぐ女性陣は、まるで南国でバカンスを楽しむモデル集団のようであった。

眼福眼福、と思いつつ。

グビリ、と鬼酒^{きしゅ}を呷^{あお}る。

爽快な青空、穏やかな海風、美味しい酒、充実した施設が揃った、快適な船旅。

最高の環境でゆっくりとした時間を過ごす、充実した一日であった。

《二日目》

【異空間収納能力^{アイテムボックス}】に大量に貯め込まれた食材によって、俺達の食料事情は非常に豊かだ。

新鮮なまま保存されている野菜や肉類は種類も量も豊富で、調味料や酒類も商売ができるほどある。

前世で大昔にあったとされる大航海時代では、豪華な食事が用意できる船長など一部を除いた船員達の間で、ビタミンC不足による壊血病^{かいけつびょう}が問題になっていたらしい。時には船員の半数以上が発症し、死に至った事もあったそうだ。

生野菜や果実などがあれば防げるのだが、当時は冷凍技術が未発達で長期保存できなかった、加熱調理でビタミンが減った、などの理由で、解決まで長い時間がかかった。

しかしこの世界には、新鮮なまま野菜や果物を大量に運べる収納系マジックアイテムがあるので、食料事情はそれほど悪いものではない。

収納系マジックアイテムは高額かつ希少な品であるものの、そもそも長期間の航海をするのは極一部の有力な船団だけ。なので数を揃えられる為、発症する者は殆どいないそうだ。

などという話はさて置き、そんな訳で船旅でも食卓は豪華な料理で彩^{いろど}られているとはいえ、折角大海に居るのだ。釣り上げた魚を使った料理を楽しむ事こそ、船旅の醍醐味^{だいごみ}ではないだろうか。

流石にずっと魚介類だけだと飽きるかもしれないが、まだ数日しか経過していない。そんな意味

のない考えは一旦脇に置いておく事にしよう。

という事でまずは食材を釣り上げる必要がある。しかし、俺達が居る上層部からだと海面まで距離がありすぎる。

余分な力は使いたくない。そこで、船尾の海面付近に釣り専用の部屋を新しく増築した。

設定をちょっと弄^{いじ}るだけだったので、作業は数秒で完了。そこからマジックアイテムの【白銀釣竿シルバンガフル】や【赤紫釣竿パルレナイド】を使って糸を垂らす。

大物狙いで、餌^{えさ}は【真竜精製】によって生み出した黒竜の肉を使ってみたところ、思った以上に喰いつきが良く、釣り上がるのは最低でも五メートルを超える大型ばかりとなった。

その大きさ通りの重量から、白銀釣竿と赤紫釣竿は大きくしなる。しかし折れるような気配は全く無い。ただ釣る事のみに特化している白銀釣竿や赤紫釣竿は、海龍すら釣り上げられる性能があるのだから、ある意味当然の結果である。

ともあれ、数時間ほど楽しんだ釣果は、五メートル級の青刃鮫^{あおばざら}“ブルーソードラス”をはじめ、太く鋭い針を全身に備えた八メートルほどの巨大爆裂針魚“ダイボンセンボウ”や、魚人の巨人版とでもいふべき十五メートル級の“インスマギガス”、それから複雑な海流が交わる海域を泳ぐ為に滑らかで細長い体型をしている五十メートルほどの下位海龍の一種“イグレスシードラゴン”といった超大物まで様々だ。

それを、今回は飯勇^{めいゆう}が捌^{さば}ってくれた。

初めて扱う食材も数種類あったらしいが、彼等の手にかかれば何も問題ないらしい。

初めてだ、などと言いながらもその手捌き^てに迷いは無い。特注の包丁^{きざ}が煌めき、まるで手品のよう^うに気がつけば解体されている。

美味そうな料理が目の前で出来るのは、やはり気分が盛り上がるものだ。

飯勇が働く傍らで、姉妹さん達は真剣な眼差しで調理の様子をジッと見つめていた。時折メモする以外は黙したままの姿からは、格上の料理人から少しでも学ぼうとしているのがよく分かる。今後、きっと姉妹さん達が料理してくれるようになるだろう。

などと期待しつつ、出来上がった料理をジックリと味わう。

どれもが没頭するほど美味かったが、個人的にはイグレスシードドラゴンの活け造りは味だけでなく、インパクトも抜群で一押しだった。

イグレスシードドラゴンの頭は、まだ生きているかのようにピクピク動いている。

いや、実際に生きているのだろう。

この世界のある程度以上の強さを誇る存在は、頭だけになっても死なない事が多く、かくいう俺だって頭だけになってもしばらくは生きていられる。実際に経験した事なので、それは間違いない。下位とはいえ、亜龍よりも強い本当の龍の一種であるイグレスシードドラゴンの生命力は、頭部だけに^{あたま}なっても侮れるモノではない。そして生きているなら、暴れる事も可能はずだ。

何かしらの【魔法】を使ったり、頭だけで動いて大きな口で噛みついたり、生存競争の激しい

自然界で生きてきた野生のイグレスシードドラゴンなら、これくらいは当然できるだろう。

だというのに今そうできないのは、そういう風に調理されたからだ。生きたまま身動きを封じる飯勇の調理技術の卓越ぶりには、思わず感服させられる。

さて、活け造りというのは、人によつては『残酷』『可哀想』『気持ち悪い』などと感じられ、食欲を失わせるかもしれない。

だが、このピンク色に輝く切り身を見ればそんな事は思わないに違いないし、一度食べれば生きの良さが楽しみになってしまいうだろう。タップリと脂^{あぶら}の乗ったそれはまるで霜降り肉^{しもふり}だ。

口にするると溢れ出る独特の甘さ^かと旨みは、しっかりとした身を噛めば噛むほど増していき、呑み込んだ後も食欲をそそる香りが立ち昇ってくるかのようで、この幸福感は堪^{たま}らない。

陸地で育った竜・龍種とはまた違う、雄大な大海だからこそ育^{はぐ}まれた美味^{びみ}の深みは、油断すると魂まで引きずり込まれそうだ。

まあ、【神器】の味を知っている俺はそこまで取り乱す事はなく、大海という広大な世界で育まれた他の恵みと一緒に鬼酒を飲む。

グビリグビリ、かぁー、美味い。

素晴らしい食事を言い表すのに、言葉はこれだけあれば十分すぎるのではなからうか。

《三日目》

今日も変わらず、どこまでも広がっていきそうな大海を進んでいく。

陸地からかなり離れてきたからか、大海は様々な面を見せ始め、航海は段々と刺激的なものになってきていた。

というのも、この世界には空飛ぶ島など一風変わった地形がある訳だが、それは何も陸上だけの話ではない。

そういう場所が特殊海域と呼ばれていて――

龍のようにうねりながら、海上にまで飛び出す海流が無数にある海域。

普通の船なら呆気なく引きずり込まれてしまう、巨大な大渦が密集する海域。

無数の海水の玉がシャボン玉のように宙に浮かぶ、海なのに墜落死する事も有り得る海域。

まるで火山が噴火したかのように、激しく海水が噴き上がって出来た火山のある海域。

光など全く届かない深海の底にある海溝まで続く、洞窟にも似た海の孔がある海域。

――などといった例の他にも、様々な特徴を持った自然の神秘が溢れている。

ただ荒れたり穏やかだったりする程度では飽きもするが、これくらい目まぐるしいと、思ったよりも楽しめた。

まあ、【アンブラッセム・パラベラム号】という安全地帯から眺められるからこそだろうが。

ともあれ、そんな特殊海域では陸上には見られない特徴的な種族が数多く生息し、独自の文明や生態系が構築されていた。

――濃い海霧が発生する、見通しが非常に悪い特殊海域では、百数十メートルほどのちよつとした小島のような貝類系海洋モンスター「ミスシエルナル」が潜んでいた。

海霧に隠れているだけの温厚な性質だが、海面近くに浮かんではいる事が多いせいで、海流によっては船舶と衝突して沈没させる事がある。船乗りの間で海霧の中を進む際、非常に嫌がられる存在だ。

そんなミスシエルナルは、大きさを違うものの牡蠣^{かき}っぽい外見をしていた。

海霧の中で最初に見かけた時、『あの殻^{から}を破った中身は一体どれほどの大きさなのだろうか。見た目通りに大きいのか、あるいはもしかしたら意外と小さいのかもしれない。それに肝心の味はどうなのか。牡蠣^{かき}っぽい外見通りの味をしているのか、あるいは体験した事のない未知の味なのか』という考えが自然と浮かんた。

そもそも事前に情報を仕入れた時からこのモンスターの事は気になっており、遭遇したら絶対に仕留めようと思っていた。そして実際に遭遇したので、『狩りじゃ狩りじゃ』と言いながら愛用の朱槍【飢え啜る朱界の極槍】と呪槍【呪四水矛・魚鰭^{うおひれ}】を構えて突っ込んでみた。

すると反撃らしい反撃もなく、アッサリと仕留められた。勢いそのままに、乳白色のトロトロと

した巨大な中身を摘み食い。

味は牡蠣のそれだが、より濃厚で複雑な、癖になる味だった。栄養抜群なのだろうか、身体に気が漲るようである。

テンションを上げつつ、何かしらの素材になりそうな殻も含めた全てをアイテムボックスに回収し、俺達はそのまま進んでいった。

——大量の海水が浮き上がり、空に第二の海が形成されたような海域では、数ヶ月に一度の呼吸の為に浮上した白陸鯨「フースティトケロン」と偶然遭遇した。

大きな島ほどもあるフースティトケロンは、同じく巨大な【アンブラッセム・パラバラム号】を仲間とでも思ったのか。あるいは何かの気紛れか。理由はどうあれ、小一時間ほど並航する事になった。

そして、フースティトケロンの岩場のような平らな背中には、条件次第で様々な色や形状に変化する「変幻珊瑚」という特殊なサンゴで造られた街《アドラッドンデイス》がある。そこでちよつとだけ、住人の魚人や人魚達との交流ができた。

その際、上半身は人で下半身が魚である人魚はともかく、頭部や身体に魚類の特徴を持つ魚人は『ウギョギョ』と理解困難な言語や『イアッ！ イアッ！』など冒瀆的な何かを発していた。それについては【中位魚人生成】で生成した通訳魚人を介する事で、問題なく意思の疎通が可能になった。

しばしの会話を経て、彼等は非常に友好的だと分かった。
あるいは、何かしらの危険があれば海中に逃げればいとも思っているからこそその余裕なのかもしれない。

ともかく友好的であるのならわざわざ敵対する必要も無いので、案内されるまま《アドラッドンデイス》を観光してみた。
独特な街並みも良かったが、店舗らしき場所で売られている商品が目に残った。
それは色鮮やかなサンゴや深海魚の骨や鱗といった素材で造られた工芸品、また深海の食材らしき品の数々である。

どんなモノか気になり、欲しくなったものの、共通の貨幣を持っていない。
よって、精製竜の肉や迷宮で手に入れた酒、それから海中でも錆びたりしない加工が施されたドーフ製の装飾品などとの物々交換を提案。

外からの客は非常に珍しい為、提示したものは彼等からすれば入手が困難な品々だったので、特に吹っかけたり値引きしたりなどはなく、滞りなく交換は行われた。

そうして賑やかに談笑していると、【グドゥラグ】という《アドラッドンデイス》を統治している組織に所属する老魚人が、見るからに手練れだろう鮫系魚人の護衛を伴ってやってきた。

チョウチンアンコウっぽい特徴があるこの老魚人、中々気さくで、話が上手い。

護衛の鯨系魚人も厳つい外見に反して社交的であり、武人氣質なのかミノ吉くんと戦闘について盛んに意見を交わしていた。

どちらも特に敵意を秘めてはいなかったので、友好の証に【鬼酒】を酌み交わし、埋め込んだ分体を通じて連絡を取り合える名刺ならぬ「名鉄」を渡して別れた。

もっと少し話したかったが、生憎と時間切れだったのだ。

一時間ほどゆっくり呼吸したファステイトケロンは大きく潮を噴き、再び海中へと潜っていく。再び海上に出てくるのはまた数カ月後だ。

その背中の《アードラIIデンデイス》もまた海中に消えていく。

それが見えなくなるまで笑顔で手を振ってお別れをした後、俺達は手に入れた装飾品などを着にまた談笑したのであった。

——広範囲の海面がまるで鏡のように凧いだとある海域では、海のように青い「海災覇龍」という超巨大海洋モンスターの群れと遭遇した。海龍種の中でも頂点に近く、漁師や船乗り達の間で【大海の絶望】や【風の霸王】などと呼ばれて伝説が語り継がれる存在だ。

体長は小さいモノで数百メートル、大きいモノで数千キロ。この世界でも極一部の【神代ダンジョン】くらいでしか見る事のできない巨軀を誇るレヴィアタン達が、ざっと数えただけでも数十体。これほどの規模の群れと遭遇すれば、武装船舶の大船団でも数十秒と持たない。生物というより

かは、抗えぬ自然災害だ。

その気性の荒さから、実際に遭遇して生還できた者が極端に少なく、また生還できてもあまりの恐怖に精神を病んでしまうとされるのだが、しかし今回遭遇した群れは非常に大人しかった。

海原が荒れる事もなく凧いでいるのが、その証拠だ。レヴィアタンサイズの海洋モンスターが暴れれば、ここまで凧いでいる訳がない。

大人しい理由は明確で、それはレヴィアタン達を支配する【帝王】類——「豊渦海災帝王覇龍」がこの場に存在したからだ。

グランド・レヴィアタンは、通常のレヴィアタンなど子供にしか思えないほど更に巨大だった。巨軀の大半は深海に潜っているの、全体像は定かではない。しかし長大すぎるせいで海上にまで飛び出し、まるで山脈のようにすら見える巨軀の一部だけでも、横幅が数百メートルはある。

そしてまるで地層のように積み重なった分厚く巨大な龍鱗や、龍殻で覆われた胴体の太さから想像できる巨大な頭部は、もはやどこにあるかすら分からず、その反対になる尻尾も分からない。

全力で探った結果、体長は最低でも数十キロは確実にあり、もしかしたら数百キロにもなる可能性すらある。

今回は俺以上に索敵能力に優れる【九祇鬼姫・亜種】のクギ芽ちゃんに頼んでみたのだが、巨軀の大部分が海底近くまで潜っている現状では、流石に彼女の眼ですら全貌を確認できなかった。

ここまで来れば、常識外れと言うしかないだろう。

想像以上の大きさに驚きつつも、遠くから観察を続ける。すると、どうやらイソギンチャクと共生するクマノミのように、その周囲には種々様々な外敵から逃れてきた小魚が群れを成している事が分かった。

グランド・レヴィアタンは巨大すぎるが故に小魚達を認識すらしておらず、レヴィアタン達も餌にするのはもっと大型のモンスターなので、小魚達は撒き餌くらいに思っているのかもしれない。そうした事情はともかく、凪いだ海にはある種の楽園のような環境が構築されていた。

個人的には、やはりグランド・レヴィアタンとレヴィアタンの群れに強く興味を抱くのだが、今回はその姿を視認しただけに留めておく。

正直に言えば、喰ってみたいという欲求はある。鱗一枚でもいいから喰ってみたいものだ。

しかし計測すら不可能なほど巨大なグランド・レヴィアタンを殺すのに必要な時間は、予想すらできない。

数日か、あるいは数十日か、それ以上必要になる事も有り得るだろう。新大陸に向かっている現在、手を出すべきではない。

また別の機会に挑むのは確定として、その時は対策の百や二百は用意してからになる。取り巻きのレヴィアタン達を排除し、こちらに有利な場所で戦うなどの下準備は最低条件で、ミノ吉くん達が手伝ってくれるにしても、攻略するのが困難な相手である事は変わらない。

何せ、グランド・レヴィアタンは【神々】の力の一部を取り入れた【神獣】という存在である可

能性が非常に高いからだ。

【神獣】である明確な証拠など無い。しかし、まるで同類を見つけたように【鬼神】である俺の身体が反応している。俺は【神獣】ではないが、世界からすればそれに近い存在に違いない。

だから【神獣】であると仮定して話を進めると、グランド・レヴィアタンの圧倒的すぎる重圧感からして、【亜神】や【神】ではなく、恐らくは【大神】の一柱に関係した【神獣】だ。それ以外に考えられない。

——さて、そうなると、どの【大神】の【神獣】なのだろうか。

俺との関係が深い【終焉^{シユエン}と根源を司る大神】と、【救世主】に関係が深い【誕生と叡智を司る大神】は何となく違いそうだ。

それっぽいなれば【自然と魂魄^{こんぱく}を司る大神】か、【時空と星海を司る大神】だろう。

どちらもありそうだが、司る象徴色からすれば【自然と魂魄を司る大神】が有力だ。

グランド・レヴィアタンの体色は、赤みがかった薄い紫色をしている。

周囲のレヴィアタンが海のような青い体色である事、また【自然と魂魄を司る大神】の象徴色が赤色という事を考えると、青と赤が混ざってそうなのではないだろうか？

象徴色が青である【時空と星海を司る大神】だったら、もっと深い青色になるはずだ。これは結構的外れな推理ではないのではと思われる。

そこまで考え、ふと、以前《クラストー山脈》で遭遇した恐るべき「ディアホワイト」を思い

出す。

当時は分からなかったものの、ディアホワイトもまた【神獣】の一種であるのは、ヤツの角を喰ってラーニングしたアビリティ【神獣の守護領域】からして間違いない。

となれば、ディアホワイトはどの【神】の【神獣】なのかという事だが、一定以上の力を持つ事、かつ象徴色から考えると、【誕生と叡智を司る大神】かその従属神である可能性が非常に高い。

そしてあの時は俺の子供達が生まれたばかりだった事からして、【誕生】を司る【大神】が正解であるようにも思えるのだが、それにしても角から得られた力が微妙だ。本当にそうなら、もつと途轍もない力を得られただろう。

いや、もしかしたら本体で出てきた場合は何かしらの影響が強すぎるので、あのディアホワイトには封印が施されていたとか、あるいは弱体化した状態だったとかかもしれない。

そう考えれば、納得はできる。

しかしそうなると、どうしてわざわざ会いに来たのだろうか？ 俺が同格の【終焉と根源を司る大神】の【加護】を得ていたからだろうか。あるいは何か他の理由だろうか。

しばし悩むが、以前手に入れてからも用途不明のままの【■■■■の眷属】が怪しい気がする。

これがあるから、【誕生と叡智を司る大神】は子供達の誕生祝いに角を持ってきてくれたのだろうか？ 考えても分からない。

これ以上は脱線しすぎるので、一旦グランド・レヴィアタンに話を戻そう。

この星の全ての海を支配していそうな【神獣】グランド・レヴィアタン。正直コイツこそが【世界の宿敵】の一体ではないか？とすら思う。

しかし違うな、とすぐに自分で否定する。

実際、【世界の宿敵】と成り得る可能性は、大いにあるだろう。こんな巨体が暴れば、陸地はかなりの範囲が浸蝕され、島であれば海に沈んでしまう。

それだけの力はあるものの、しかし【世界の宿敵】になるには何かが足りないのだ。

大海の中で暮らしているだけで、陸上に進出する気など全くないからだろうか。

ともかく、過去最も手応えのあった【救世主】と同等かそれ以上だろう上物を前にして喰い損ね、我慢するしかないというのもなんだかなあ、と思いつつ。

また会ったその時には準備を整えて喰ってやろうと心に決め、グランド・レヴィアタンによってまるで海の楽園のような環境が出来上がっている風いだ周辺海域を観察する。

群れから離れたレヴィアタンが居ればそつと首を切り落として回収してやろうと思っていたのに、残念ながら居ないらしい。

それにしても、こうして未知の存在に遭遇するのも、旅の醍醐味の一つではなからうか。百聞は一見に如かず。実際に見る事は、ただそれだけで大切な糧となるのである。

などと思いつつ、今日も最上階のプールでゆったりと過ごした。

皆水着姿であり、男性陣はともかく、女性陣の華やかな事華やかな事。様々な水着を着たカナ美

ちゃん達は眼福ものだ。

良い機会なので、こちらもジックリ見させてもらおう事にしよう。

《四日目》

何処までも続くような大海を、二隻の船舶が進んでいく。

一隻は、当然【アンブラッセム・パラベラム号】。

雄大で危険に満ちた大海を王者のように進む様は、もはや圧倒的とすら言える。

そんな【アンブラッセム・パラベラム号】と並ぶと小さく見えるものの、それでも百メートル級のもう一隻は、海龍船【シャークヘッド号】である。

これは、普段俺がベルト代わりに腰に巻いている【召雷黒龍・鬼鯨縄】によって召喚された黒鬼鯨龍——『デスシャークヘッド・ブラックボルトドラゴン』が、【神器】である【船舶神之操舵輪】の能力の一つ【船舶昇華】で一時的に船舶と化したモノだ。

折角の航海だ。最後まで【アンブラッセム・パラベラム号】に乗って楽しむのも良いが、こんな機会にしか体験できない事をしてみたい。

という訳で、もつと使いやすい大きさの船として【シャークヘッド号】を用意し、今は俺をはじめほぼ全員がこっちに乗船している。

【シャークヘッド号】は元となった黒鬼鯨龍の特徴が色濃く出ていて、外敵を屠る武装が船体各所

に取り付けられた軍艦のような形状だった。

鋭利な龍角は鋭く伸びる衝角となり、敵船舶や海洋モンスターに風穴を開ける事が可能だ。

船腹には雷鳴宝石製の鰭の一部が変形した数十門の魔砲がズラリと並び、試し撃ちしてみると雷で構成された砲弾が発射された。着弾すると海面に拡散していく為、海中よりも海上の敵に対する攻撃法として優れるようだ。

船体の装甲は鯨の楯鱗のような構造で、波を効率良く受け流したりして航行速度を上げる役割に加え、触れれば敵を削る能力まである。速度の乗った体当たりをすれば、それだけで敵を削り殺せるだろう。

船底を覗いてみれば、そこには無数の雷針が備わっている。こちらは海中から襲い掛かってくるモンスター対策らしく、魔力を帯びた雷撃が放たれば海中でも関係なく敵を穿つだろう。

そして船の顔とも言える船首像は、まるで大口を開いた黒鬼鯨龍の獠猛な頭部のようなデザインで、その口には龍種のブレスを放つ主砲が隠されている。

他にも多種多様な武装を搭載している【シャークヘッド号】は、雷鳴宝石製の鰭による高速航行と自動航行を可能とした高速戦闘戦艦とでも表現するのが適切だろうか。

ちなみに船舶状態でも黒鬼鯨龍の意識は残っているらしく、襲ってくるモンスターを自動的に迎撃してくれる優れモノだ。

倒したモンスターの回収までしてくれるので、ここぞとばかりに新鮮なブラックフォモールのプ

ロック肉を撒き餌としてドボドボと投下。

後は釣り糸を垂らして待っているだけで、血肉に誘われたモンスター達が大量に釣れた。

普通に釣り上げたモノもあれば、雷撃で仕留められたモノもある。中には、船腹で釣りを楽しんでいた俺達に向かって海中から襲い掛かってくるモノまで居た。

釣り上げられたのは、丸々と脂の乗った蔵ついで面の「極道マグロ」や、青蛇のような見た目の「青蛇ウナギ」など、やや小型の獲物だ。

雷撃で仕留められたのは、船舶を海中に引きずり込む事で有名な「大海大烏賊」や、巨大海洋モンスターに引付けいてお零れを狙う「大判鯨」など、大型の獲物が多い。

勢いよく襲い掛かってきたので俺達が直接仕留めたのは、上顎が螺旋を描く槍のように伸びて特徴的な吻を形成する「螺旋槍羽魚」や、頭部から胴体までが白鯨でその後ろに大蛸が合体したような「白鯨大蛸」など、大型で獰猛な獲物だ。

流石にここまで遠くに来ると、見た事のないモンスターで溢れている。

そして未知とはつまりまだ体験した事のない味との出会いであり、姉妹さんと飯勇達によつて調理されたそれらはどれも美味そうだった。

見た目的にそれはどうなのよ、というモノもないではないが、普段とは違う状況なのだからと柔軟に受け入れ、どれも美味しく頂きました。

個人的には白鯨大蛸がオススメだ。コリコリとした食感の蛸足が、鬼酒のツマミに最適だった。

鬼酒、蛸足、蛸足、鬼酒。そんな流れでどんどん腹に入っていく。

そうして【シャークヘッド号】にて開かれた宴会も夕方には片付けて、夜は【アンブラッセム・パラベラム号】に戻ったが、そこでもまた宴会は続いた。

【シャークヘッド号】には【シャークヘッド号】の良さがあり、【アンブラッセム・パラベラム号】には【アンブラッセム・パラベラム号】の良さがある、と比べて初めて分かる事もあった。

一つひとつ経験を積みながら、俺達は進んでいくのであった。

《五日目》

今日は、波が穏やかで澄んだ青色が特徴的な海域に到達した。

ここは特殊海域ではないが、潮流が速く、それでいてこれまでのような危険な海洋モンスターはあまりいないようだ。

その為、グランド・レヴィアタンが居た特殊海域ほど豊かではないものの、普段なら他の生物の餌になってしまいう小魚などが多く生息している。

折角なので、アイテムボックスに収納していた魔導船を二隻取り出し、それを使って漁を行う事にした。魔導船の上から【豊漁の大網】という漁網型マジックアイテムを海に投げ入れて引き上げるだけの、簡単なお仕事だ。

本来ならもう少し手間とかが必要だろう。しかし【豊漁の大網】は魚類に対して【魅了】効果を

發揮するので、適当に展開しておけば後は引つ張るだけで魚が獲れる。

漁師からは何だそれ、と言われそうなマジックアイテムだが、そういうシロモノなのだから仕方あるまい。

そんな訳で、獲りすぎないように気をつけながらせつせと網を広げたこの日の夜。

食事中、カナ美ちゃんに『後で私の部屋に来て』と言われたので、彼女の部屋——各自の分を用意してあるが、カナ美ちゃんは俺と一緒に寝る事が多いので私物置き場のようにになっている——に赴いた。

といっても俺と隣の部屋なので、すぐに到着する。

ノックをすればすぐに『入って』と言われ、ドアを開けた。

そして視界に飛び込んできたのは、まるで宮殿の一室のような豪華な内装の部屋で、薄い生地の上着を着てソファに腰掛けるカナ美ちゃんが、優雅にワイングラスを傾けている姿だった。

カナ美ちゃんの姿は美しく、扇情的である。しかし、俺の意識はワイングラスに注がれた赤い液体に傾けられた。

離れていても感じる、その液体に秘められた魔力。酒精を帯びた豊潤な香りに思わず喉が鳴る。

ワイングラスに視線を固定したまま、呼び出した理由を尋ねると、一緒に飲もうという事らしい。それは嬉しい限りなのだが、この赤い液体は何なのだろうか。そう思いながら対面に座ると、カナ美ちゃんはその正体を教えてくれた。

それは、彼女が【聖戦】で倒した前【魔帝】ヒュルトンの血を原材料に製造した鬼酒だった。

どうやら、ヒュルトン——通称魔帝との戦闘時に集めた血と自分の血とその他あれこれをブレンドしたそうで、その味は恐るべきモノがある。

ひと口飲んだだけで全身を駆け巡る、濃厚で豊潤で複雑な熟成された味わいの衝撃。

心身が凍てつくような、しかし同時に燃えるような不思議な感覚がする。

熱いのに冷たい、冷たいのに熱い。カナ美ちゃんとヒュルトンの魔力が混ぜ合わさったそれは、両者の良い部分を損なう事なく高め合い、思わず嫉妬するほど渾然一体となっている。

全く、死んだ後でも良い一撃を入れてくれる。

ちよつとだけ複雑な思いでグビリグビリと飲み、ついでに飯勇に予め調理してもらった【魔帝料理】を取り出して喰いました。

ちなみに衣服を剥がれたヒュルトンは、ヒト型の黒っぽいスライムのような肉体をしていたので、調理によって豆腐のような独特な柔らかさとなっている。

【能力名】アビリティ【帝王勅命】のラーニング完了】

【能力名】【召喚術】のラーニング完了】

【能力名】【契約術】のラーニング完了】

【能力名】【異界を観る者】のラーニング完了】



【能力名】^{ワグレス・クリフォートス}魔界揺蕩う魔帝の僕【のラーニング完了】

内包していた【神力】の分だけ竜帝肉にすら勝る【魔帝料理】に満足した後は、ベッドの上でカ
ナ美ちゃんの事も頂きました。

意図的に俺の嫉妬心を刺激したのだから、相応の結果が待っているのも覚悟の上だろうさ。

《六日目》

今日も大海の上で遊ぶ事になった。今回は、条件を満たした為に新しく精製できるようになった
『ブラックイグレスシードラゴン』に【船舶神の操舵輪】を使用する。

俺の影響を受けた黒化によって普通のイグレスシードラゴンよりも大きかった身体はギュッと圧
縮され、最終的には特殊小型船舶——つまりは水上バイク【ブラグレス】となった。成人男性が三、
四人は余裕で乗れるほどの大きさで、速度も出る。

浮き輪代わりになる俺の分体製ジャケットを装備し、オーロやアルジェントら子供達を後ろに乗
せて海上を走ってみる。

地上より速く感じられる疾走感に子供達も大はしゃぎで、意図的に振り回して海上に投げ飛ばし
ても、楽しそうに笑っていた。

今居るのは、波が比較的穏やかで、透明度の高い海水が特徴的な《レースルード海域》だ。

襲い掛かってくる海洋モンスターもいないので思いっきり楽しめている訳だが、子供達は次第に慣れてきたのか、最初ほどの反応はなくなる。

そこで【ブラグレス】をモーターボートくらいの大きさにし、持ち手の付いたロープを設置。簡単に言えば、両足にボードをつけて曳航^{えいこう}されながら水面を滑る、ウェイクボードにしたのである。最初は手本という事で俺が挑戦したところ、ここで希少^{レアスギル}能力【水乗りジョニー】が効果を發揮した。自動的に航行する【ブラグレス】に曳航^{えいこう}されながら、飛んだり跳ねたり回ったりと技を決めていく。

初めて見るそれに興奮した子供達がこぞって挑戦するも、ちよつと難しかったのだろう。最初のうちは立ち上がるのに手間取ったり、途中でロープを手離してしまったりと、失敗続きだった。しかし慣れれば早いもので、すぐにそれぞれ乗りこなせるようになった。

結構体力を使うのに、子供達はケロリとして余裕そうだった。

ちなみにミノ吉くん達も挑戦したが、身体が大きさが大きさにだけ【ブラグレス】ではパワー不足で思うようにいかなかったたので、【シャークヘッド号】なり魔導船なりでカバーしておいた。

ともあれ、そんな感じで大海を満喫した日だったと言えるだろう。

夜飯には素潜りで獲った魚を焼き魚にしてウマウマと喰いつつ、この調子なら明日も良い一日になりそうだと思うのだった。

《七日目》

残念な事に、今日は時化^{しけ}である。

雷雨が激しく降り注ぐ外に出るのは面倒だったので、船内にてゆつくりと過ごす。

設置した場所同士を行き来可能な【鬼哭門^{きこくもん}】を使うという選択肢もあったが、書かねばならない書類などもあったので、事務仕事に徹した。

そして気がつけば夜がやってきていた。

まあ、こんな一日もあるだろうさ。

《八日目》

今日は《星降^{ほしふ}りの海》と呼ばれる特殊海域を航行中だ。周囲に降り注ぐ小さい隕石^{うたぎ}が鬱陶^{うとう}しい。不可思議な守りでもあるのか直撃する事もないし、大荒れの波で揺れる事もない。

しかし爆音と衝撃波までは止まらず、飛び散った海水が雨のように降り注いでくる。面倒なので今日も船内にて過ごす。

仕事を消化しつつ、休憩時間にはカナ美ちゃんを背負った状態で、鍛冶師さんや錬金術師さん達の所に顔を出す。

鍛冶師さんはここ最近、アス江ちゃんと一緒になって宝飾品の製作に夢中である。

傍らには、鍛冶に興味がある鬼若^{おにわか}だけでなく、【宝石の神】の【加護】を持つオプシーもいて、あれこれ思った事を言っているようだ。談笑しているそこに交ざり、俺もデザイン案を出してみる。錬金術師さんは、姉妹さん達と一緒に厨房で何かやっているようだ。興味を引かれたので覗いてみると、海鮮食材に合う新しい調味料の研究中らしい。

あーでもない、こーでもない、と楽しそうに笑い合っていたので、保存してある食材を手土産に俺も会話に交ざる。新しい調味料の道はまだまだ長く険しいが、そのうちきつと何か作ってくれるだろう。後から飯勇達も交ざってきたから、すぐにどうにかなりそうだ。

その他にも仕事の合間合間に皆の所を回り、あれこれやった。

そうこうしているうちに時間が過ぎて鬱陶^{ふさふさ}しかった《星降りの海》を越え、夜には外も穏やかだった。

晩飯の後、ふと単鬼^{たんき}で鬼酒が飲みなくなり、夜風に吹かれながら晩酌していると、ミノ吉くんが無言でやってきた。

その手には、飯勇によって調理されたい、前【獣王^{ビーストキング}】ライオネルの肉料理がある。

ひと言も発しないまま肉料理を挟んで座ったミノ吉くんに、鬼酒を注ぐ。

鍛えられた四肢の肉と、熱く滾^{たぎ}っていた心臓を用いた料理をツマミとして、無言で同時に鬼酒を呷^ある。

鬼酒は変わらず美味いが、今晚だけは肉料理を彩る脇役に過ぎなかった。

さほど手の入っていない、焼いただけのようなそれは、しかしひと口食べただけであの黄金に輝いていたライオネルが思い浮かぶほど鮮烈^{せんれつ}だった。

囁^{ささや}む毎に全身に野性が宿ったと錯覚するほど、溢れ出る魔力が四肢に満ち、全身に力が漲る充実感。

【聖戦】において、ライオネルの相手はミノ吉くんに譲ったが、一手だけでも手合わせしたかったと今更ながら思う。

その僅かな後悔をスパイスに、肉を喰う。

【能力名【獅子王ノ黄金鎧】のラーニング完了】

【能力名【獅子王ノ霸道咆哮】のラーニング完了】

【能力名【百獣ノ獅子王】のラーニング完了】

【能力名【獣統^{ビークラント・ヴァナース・ガロ}べる獣王の断罪】のラーニング完了】

殺した強敵の味を忘れぬように、俺達はただ黙って、肉料理を全て平らげたのだった。夜空に、ライオネルだけでなく、ヒュルトンの姿も見えた気がした。

《九日目》

チラホラあった特殊海域が少なくなり始め、どこか出航した頃のような感じがしてきた。もしかしたら新大陸が近いのかもしれない。

そう思つて黒鯨提督に確認してみると、どうやら本当はかなり近くまで来ているようだ。今日中の到着は無理だが、明日には到着できるらしい。

普通なら数カ月単位の時間をかけねば大海を越えて大陸間を行き来する事はできない、と聞いていた。それがこれほど短縮できたのは、それだけ【アンブラッセム・パラベラム号】の性能が素晴らしかったという事と、黒鯨提督の航路選択が正しかったという事の証明だろう。

まあそんな話はいいとして、今日もブルサイドで優雅に鬼酒を楽しんでいると、遥か遠くに、何かの影を見つけた。

最初は遠すぎてよく分からなかったが、それは俺達と同じ方向に進んでいるし、こちらの方が速いので段々距離が縮まっていき、次第にその姿をハッキリと視認できるようになる。

それは、十数隻の武装船舶で構成された船団だった。

全ての船体に損傷が目立つ。比較的損傷が少ない船舶もあるもの、多くはあの手この手で応急処置してギリギリ浮いていられるような状態だ。

長い長い航海中に、様々な海洋モンスターに襲われたのだろうか。

今ここにいる他にも、沈んだりはぐれたりした船舶があつたのかもしれない。彼等の苦勞がありありと想像できた。

しばらくして追いつき、そのまま横並びになった時、向こうの船乗り達がこちらに笑みを浮かべながら手を振ったり、手を組み膝をついて祈りを捧げたりする姿などが確認できた。

反応はそれぞれだが、皆一様にホッとした感じで、何かから解放されたように朗らかだ。

新大陸はもうすぐそこで、命がけの航海もあと少し。

しかし船体の状態は良好ではなく、海洋モンスターに襲われたり、大きな時化と遭遇したりすればかなり危険な状態になりかねない状況には違いない。心身の疲労やストレスが船乗り達に重く押し掛かつていたのだろう。

そこに、海の男達にとつてとても関係の深い神々の一柱である【船舶の神】の【神代ダンジョン】が通つたと考えれば、まるで守り神にでも遭遇したかのようなあの反応も頷ける。

そういう理由もあつて沸き返る船団は、何と速度を上げた。

【アンブラッセム・パラベラム号】の近くなら凶悪な海洋モンスターに襲われないと思つたのか、あるいはただ単純に離れたくなかつたのか。

何はともあれ、彼等の努力もあつてしばらく並航する事になったのだが、それでも地力が違いすぎたので、徐々に離れていく。

他にも色々と暑苦しい海の澳の儀式のやり取りがあり、その一部始終を見学した後、俺は気持ち

を切り替えて残り少ない休暇を楽しむ事にした。

うん、青空の下で飲む鬼酒は良いもんだ。

《十日目》

陸地が近いだけあって、昼頃から見かける武装船舶の数が増え始めた。

それは俺達に随行する船団の拡大に繋がり、加えてチラホラと漁船らしい装甲を補強した中型船舶の姿を見つけられるようになった。

武装船舶ほどは遠くまで行けないそれを見かけるという事は、つまり中型船舶で行き来できる距離に新大陸があるという事だ。

ワクワクしながら到着するのを待つ間、中型船舶に居る【職業・漁師】^{ジョブ}持ちだろう人間が網を設置したり、魚人達が鰯^{いわし}を持って海に潜ったりしている漁の様子を見学する。

俺達はマジックアイテムによって手取り早く行つた漁だが、彼等は本業だけあって動きに迷いが無い。

それをぼんやりと見下ろしながら、短いような長いような、振り返ればあつという間だった初航海をゆっくり振り返っていると、自然と皆が集まってきたので、プチ宴会を行う事にした。

新大陸に到着すれば、未知なる食材を求めて勢力図を拡大するなど、やるべき仕事は多い。

その英気を養うという意味もあつてのプチ宴会では、飯勇と姉妹さん達の料理が振る舞われ、エ

ルフ酒や迷宮酒などの酒樽が幾つも空となつて転がる。

何だかんだと気分良く酒を飲む理由にしたところもあるが。

そうしていると、気がついた時には初航海は終わりを迎えていた。

【アンブラッセム・パラベラム号】はやや沖合で停泊し、黒鯨提督が到着の知らせを持つてくる。

見れば確かに新大陸がそこに在り、港湾都市の賑わいが目から伝わってくる。

【アンブラッセム・パラベラム号】のサイズと水深の関係から、ここから先は小舟を下ろして上陸する必要がある。夕暮れが近かつた事もあって、今日はそのまま休む事にした。

プチ宴会は普通の宴会となり、飲めや歌えの大騒ぎ。

新大陸という新天地で、未知の美味なる食材を発見する事を祈って、俺達は杯を掲げた。

鬼酒を注いで、乾杯だ。

《十一日目》

新大陸に関しては、事前にある程度は調べてあつたが、俺達を知る事のできた情報は少ない。

積み重ねてきた歴史、この地独特の文化や風習。周囲の地理と厳しい自然、何より美味なる食材の種類など、まだまだ知らない事の方が圧倒的に多い。

特に、食材について知らないのは問題である。これは今回の旅の大きな目的の一つなのだから、迅速に情報を集めるべきだ。

もちろん、ここで生きる人々の情勢など、当然知らなければならない情報も一緒に。

という事で、実は昨夜のうちに分体を複数放ち、色々と調べてみた。

時間的な制約で集められた情報はやや少ないが、大体以下のようになる。

まず、目の前の港湾都市は交易都市国家《ムシラム・ジャンナ》というようだ。

他の都市国家を繋ぐ要所に存在し、新大陸有数の巨大河川《ガンジナムス大河》が都市中央を通って大海に繋がっている。その為、元々俺達が居た大陸相手だけでなく、広範囲にわたって交易を行う事で発展してきた。

人口も数十万、あるいはそれ以上とも言われるほど多く、新大陸における重要な都市国家の一つに数えられ、そこそ長い歴史がある。

そして新大陸は、気温が高い反面湿度は低く、乾燥した大地が広がっているらしい。

広大な大地の半分近くを占める砂漠地帯は、昼と夜の温度差が激しく、過酷な環境に適応したモンスターが昼夜問わず襲い掛かってくる危険地帯だそうだ。

それでも、ここで暮らしている人々は遅く、各地に点在する安全地帯を中心に都市国家や集落を築いている。そうした都市国家で暮らす者以外にも氏族単位、部族単位で各地を放浪しながら暮らす者も多くいるようだ。

また、数少ない安全地帯をめぐる争奪戦が昔から激しく続いてきたからか、血には血を、報復には報復を、という殺伐とした文化があるらしい。

略奪が日常的にあり、犯罪が多い。そしてそれを力でねじ伏せる剛の者もまた多い。争いが身近な分、個の戦闘能力という点で見れば新大陸はかなり良質だろう。

自らの正義を貫くには実力が必要になる為か、単純な力、というのは敬われるステータスとされている様子だ。

一先ず、ざっと調べた感じではこうなった。

これ以上は実際に見聞きした方が早いと判断し、誰も俺達の事は知らないだろうが用心の為にちよつと変装して、自ら行く事にした。

変装は、まず銀腕の一对を和風の全身甲冑に形状変化させる。部分部分で色を変えて装飾にもちよつと拘りつつ、その上にそこそこ大きめの黒い外套を羽織る。

角が邪魔になるので兜は装備しないが、思い付きで自家製布から作ったシュماغで首元を包んでみた。微妙な組み合わせかとも思ったものの、これが案外似合うらしい。

砂避けのマスクなど様々な事に代用できるシュماغは、いざという時に役立つってくれるだろう。

甲冑に合わせて、腰には鍛冶師さんが造ってくれた二振りの鬼哭刀を佩く。

闇精石と魔法金属と銀腕の合金を鍛えた黒い鬼哭刀は【童子切黒綱】、光精石と魔法金属と銀腕の合金を鍛えた白い鬼哭刀は【鬼哭丸白夜】と号をつけた。

俺の前世の出身国に伝わる天下五剣を参考にした号だが、本家の伝来が鬼に関連しているからか何となく親近感が湧いてくる。

それに普段の得物である槍とは勝手が違うものの、訓練で使ってみると、銀腕を素材の一つとして使用している為か手に良く馴染んだ。

刀身は元となった銀腕の特性によってある程度の形状変化が可能で、それを利用すれば変幻自在な斬撃を繰り出す事ができる。

手の延長のような感覚で戦えるし、偶にはこういったスタイルでやるのも悪くはないだろう。という具合に、全体的には鎧武者っぽい格好になった。

しかし、革鎧とか部分的な金属鎧ならともかく、高温で砂漠地帯の多い新大陸で金属製の全身鎧など、ちよつと頭が大丈夫かと思うぐらいには環境に適していない。蒸し焼きになりたいのか、と言われても仕方ないような武装である。

一応【温度調節】の能力がついているマジックアイテムなどは結構あるので、そういった類だと解釈してくれるだろう。

それにそう思われなかったとしても、別に死ぬ訳ではない。そこまで気にしなくてもいいとは思う。

ともあれ、他の皆も俺のように普段とは違う、やや新大陸風の新ファッションに着替えた。こうして衣装を変えるのも、旅の醍醐味かもしれない。

準備が整うと、夜明けと共に【アンブラッセム・パラベラム号】を攻略にやってきた新大陸の冒険者に入れ替わりで、ゆつくりと波に揺られながら小舟で《ムシラム・ジャンナ》に向かった。

ちなみに今回は、身体が大きくて小舟に乗れないミノ吉くとアス江ちゃんは留守番、その他は希望者だけである。まあ、殆ど全員が行く事を希望したが。

やがて、数百隻以上はありそうな船が犇めく巨大な港に到着、久しぶりに大地に足をつけた。

航海中、大波が来ても殆ど揺れを感じなかったので、感覚的にはあまり変わらないのだが、やはり落ち着く感じもある。オーロやアルジェントなども、どこか嬉しそうにしていた。

そのまま目的もなく適当に歩いていると、朝も早くから大きな広場で賑やかな市場が開かれているのを見つけた。

移動のできる屋台が数十数百と集まった市場に興味を引かれて寄ってみれば、流石は新大陸というところだろうか。見た事もないような商品が多く並んでいる。

奇妙な色合いと形状の野菜。大きなトカゲ型モンスターの生肉。六十センチほどの蛇型モンスターが一匹丸々入った酒瓶。見た事もない不細工な魚。

やや刃毀れた黄色い曲剣。血の痕の残る古びた革鎧。砂避けの外套。大量の水を入れられる草の水筒。

鉄板の上で焼かれた肉料理。新鮮な大魚一匹を捌いた魚料理。果物に飴のような何かを塗った菓子。

その他にも様々なモノが売られている。

ふむ。こういう市場にこそ掘り出し物がありそうだ。

そう思いつつ、俺は反射的に、人混みに紛れてぶつかってきたスリの利き手を握り潰す。

普通なら激痛でのたうち回るところだが、握り潰すのが速すぎた事と、同時に【蛇毒投与】による即効性の神経毒で感覚を奪ったからか、スリはそのまましばらく走って路地裏に消えていった。

そして少しして、喧騒の奥から僅かに聞こえてくる悲鳴。どうやらやっと自分の手の変化に気がついたらしい。

反射的にやった事なので、恐らく普通に治療するのは難しい状態になっているだろう。

ちよっとだけやり過ぎたかなと思いつつ、今の俺のようなかなり厳つい甲冑姿の相手にも物怖じしない姿勢に、ある意味感心する。

それだけ金持ちだと思ったのかもしれないにせよ、バレた時の危険については考えないのだろうか？ まあ、どうでもいい事だ。

狙う相手を間違えた、因果応報だと諦めてもらうしかない。

貧困に喘ぐ孤児とかのスリだったならもう少し考えるが、今回はいい大人だったので、この事はすぐに忘れた。

スリの今後よりも、目の前の地酒の方が俺にとって大切なことから仕方ない。

そこらで売っているのを注文してグビリグビリ。安酒なので大した味ではないが、これまでと違った風味がする。

温いのもちよっと残念だったし、他に良い酒はないかと、探索を続けるのだった。

《十二日目》

昨日一日観光しながら情報を集めた結果、分かった事は多い。

ここ《ムシラム・ジャンナ》は交易都市国家というだけあって、他では手に入りにくい多くの商品が各地から流れてくる。

日用品はもちろん、武器やマジックアイテム、種類豊富な食材に伝統工芸品や家畜など、日々変わる商品が売られている市場は見ていて面白い。

欲しい物があるならここに行け、と言われていただけはあるだろう。

ただそれだけに、利権やら利益やらを求めて魑魅魍魎が集まる、という性質もあるらしい。情報収集も兼ねて梯子した複数の酒場や、分散させた分体を通じて知ったところによると、遡る

事十年前まで、交易都市国家《ムシラム・ジャンナ》を長く統治してきた領主一族が居た。

そもそもかつてここにあったのは、ありふれた小さな海村だった。しかしそれを、数代前の領主にして【海原の勇者】だったムシラムが、河と海面の水運による交易や当時暴れていた海賊の討伐などによって急激に大きくしていき、彼の子孫が領主を務めてきた。

祖先ムシラムの力によるものか、領主一族には代々何かしらの能力があった。力が強いだとか、魔力が豊富だとか、あるいは海水を自在に操るなどで、それなりの戦闘能力も有した。

その領主一族は、長く続く組織には大小問わず生まれる不正や腐敗はあれど、破綻せず富をもた

らす程度には上手く都市を運営していたらしい。

しかし現在は違う。

《ムシユラム・ジャンナ》の裏社会を牛耳り、表社会にも大きな影響力がある五つの組織——マフイア、あるいはヤクザ、もしくは裏ギルドのような存在——が協定を結び、領主一族のほぼ全員を皆殺しにしたそう。

当時まだ生まれたばかりの赤子だった直系男児と、領主の妾の子ながら【加護持ち】で特に力の強かった一人の幼女以外は、子供から老人、遠縁の庶子まで全て殺された。大きく立派だった領主の屋敷は焼け落ちた。かなり徹底的だったらしく、十年経った今でも畏怖されながら当時の様子が語られていた。

現在は、領主直系の男子をあえて生かして飾りにし、その後見人として五つの組織のうちの一つが実権を握って統治しており、街にはそれなりの落ち着きがある。

ただ、この五つ以外にも小さな組織は無数に存在し、また外部からも新しく流入する事から、裏では小さな抗争があつたりなかったりする。安定しているように見えて、不安定な部分も見受けられた。そこら辺に付け入る隙がありそう。

一先ず、重要そうな五つの組織について簡単に纏めておこう。

まず一つ目は、成長した直系男子の後見人として現在の《ムシユラム・ジャンナ》を領主一族に

なり替わって統治している《砂漠の王》について。

褐色の肌に灰色の頭髮、血のように赤い双眸が特徴的な曲剣使いのダークハイエルフが首長として君臨するここは、権力や財力や戦闘力など、あらゆる面が高い水準で纏まった組織と言える。

表の戦力であり、《ムシユラム・ジャンナ》の治安と防衛を司る都市軍まで自由に動かせる事を考えれば、五つの組織の中でも頭一つ飛び抜けている。

ここまで勢力が大きくなると、普通は他の四つの組織が力を削ぎにかかりそうなものだ。しかし、そもそも五つの組織が協定を結ぶ事になったのはここが切っ掛けだそうで、組織間の仲介役や纏め役として利益と不利益を纏めて背負う代わりに、今の立場にあるらしい。

主な戦力は今調べているところながら、特に有力そうなのは首長であり【砂塵皇】などと呼ばれるダークハイエルフと、その妻となった領主一族の血を濃く残す【加護持ち】の美しき【砂海妃】、赤黒い装束を纏い治療困難な猛毒を扱う《赫砂》と呼ばれる暗殺部隊、そして首長のペットである血砂垂龍や血砂毒大蠍を筆頭とする調教された砂漠地帯のモンスター軍団か。

元々は外からやってきた為に他の四つと比べて歴史は浅い組織らしいが、現在は【英勇】に匹敵する戦力ではないだろうか、と思っている。

二つ目は、風俗や情報などを支配する《青布の情婦》。

《ムシユラム・ジャンナ》に存在する全ての娼婦や男娼の元締めであり、外部からやってくるそれ

らを吸収、あるいは手荒く排除する事で、夜の繁華街を支配している。

他の組織の構成員の多くもこの世話になっているらしく、寝物語で漏れた話から導き出した情報
の売買も事業の一つらしい。

この首長は、【双性の揺り籠】と呼ばれる、絶世の美貌と極上の肢体で他者を虜にする女淫魔と男淫魔の双子。直接的な戦闘能力は低いものの、体臭や視線の動きだけで他人の三大欲求の一つをある程度操作できるのは侮れない。また、性欲で頭が蕩けた忠実なる私兵《イムの愛獣》や《タムの美獣》に自爆戦術を仕掛けさせたりもするらしい。

色恋や情欲は時に理性を狂わせるので、下手に手を出すと火傷する事になるかもしれない。

三つ目は、主に海運や造船事業、海洋護衛業などを支配する《パイレーツ・デスパレード》。

《ムシユラム・ジャンナ》の経済は主に、馬車などによる陸運、内陸まで伸びる河川による水運、別大陸まで広く深く関係する海運の三つに支えられているが、規模が大きいのは海運と水運だ。

港には巨大な武装船舶が少数ながらも存在し、中小規模の商船となれば数え切れないほどにか
く多い。しばらく眺めていれば、日々引つ切りなしに行われている商品の積み卸しの光景がすぐ
に見つかるだろう。

そんな運搬において重要な船舶造りの職人を多数抱え、業界シェアの大半を占めることは、目立
ちにくいが無視できない影響力を持っている。

また構成員に魚人や人魚が多いことは、表では海洋モンスターによる襲撃に対処する海中の護衛
業などを行い、裏では商売敵に対して海賊行為を行っている。そうする事で、表と裏の両方から船
舶の需要と安全を満たす訳だ。

首長は【アルバシム海の大鯨】と呼ばれる鯨系魚人の大男。実はどこぞの海王の庶子だとか何
とかいう噂があるものの、真偽は不明。しかし見た目通りの高い戦闘能力を誇り、頭も中々良いそ
うである。

戦力には、凶暴な魚人や人魚で構成された海賊団《パレード・バイト》などがあり、陸地の戦力
は他よりもやや劣る一方、海では無類の強さを誇るらしい。

四つ目は、服用すると色々危険な違法魔法薬の製造や、マジックアイテムの売買などを支配する
《死の商人グランデス》。

この首長であるグランデスは、とある秘技により、一度人間として死んだ上でアンデッドの一
種である『砂帯の死骸』と成って復活した、なんて言われている老人だ。

その全身には包帯が巻かれ、唯一剥き出しの頭部は白い骸骨である。既に百数十年ほど活動して
いるとか、生者の心臓を食べるのが好きだとか、新しい違法魔法薬の実験で奴隷を使い潰している
など、真偽不明な噂が絶えない。

だが《ムシユラム・ジャンナ》に流通する武具の半数以上に関与するだけあって、こいつは常に

金銀宝石で装飾された豪華な外套を羽織っている。

私兵も良質な武具で武装し、その財力から五つの組織の中で最も兵数が多い。中には借金で飼いにされた高位冒険者なども居るらしく、質と量、どちらも兼ね備えた戦力を保有するようだ。

また、違法魔法薬で理性を壊した死兵部隊《レンデス・カルテル》を必要ならば躊躇なく使い捨ててらしく、五つの組織の中で一番ぶっ飛んでいるだろう。

五つ目は、近場に幾つかある中で最も近い【神代ダンジョン】を実質的に支配する、《守神の腕セクト》。

【砂城の神】が造ったその【神代ダンジョン】——【砂城の楼閣】^{シヤカル・カラフ}の周囲に堅牢な拠点を構築した彼等は、日々命がけで攻略に励んでいる。

一応部外者でも挑戦できるらしいが、どの【神】の信者であるかを確認され、かつドロップアイテムの半分を徴収されるそうで、それでは割に合わないで挑戦する者は殆どいないのが現状だ。

という事ではぼ独占状態の【砂城の楼閣】で鍛えられた《守神の腕セクト》の構成員の質は高く、ここでもしか得られないドロップアイテムによって活動資金も潤沢。このドロップアイテムには香料の類が多く、食料品関係にも影響力があるらしい。

少し離れた場所には、別の【神代ダンジョン】もある。が、道中がそれなりに危険だったり、そこは一段劣る【亜神】級だったり、厄介なダンジョンモンスターが多かったりする為、《守神の腕

セクト》の地位が揺るぐ事はないらしい。

個人的な感想だと、高い戦闘力を誇るこの首長であり、【神憑者】^{シヤマトス}と呼ばれる小柄な獅子獣人の女性はやつと苦手だ。

方向性は違いますが、どこぞの王妃を連想させられるからだろうか。

数は少ないが質は五つの組織の戦力の中で最も高い《殉教者メナク》といった他の構成員も、その王妃のメイドとかと似たような雰囲気があるのも、苦手な理由として考えられる。

まだ調べるべき事はあるが、とりあえずはこんなものだろう。

現状では、邪魔になるのは《守神の腕セクト》くらいだ。

これは当然、人目につかない【神代ダンジョン】の中に【鬼哭門】を設置するのに邪魔になりそうだからだし、同時にドロップアイテムに香辛料の類が多い事も見過ごせない。美味なる未知の食材と出合えそうな予感がある。

しかし排除するとなると、組織間のバランスが崩れて治安が大きく悪化するかもしれない。

治安はある程度保たれていた方が良いので、基本的には密かに乗っ取る方向で進めようと思う。

その方が、何かと隠し事の多い俺達にとって利益になるだろうという打算もある。【鬼哭門】を使って大陸間移動する場面を部外者に見られたくはないから、《守神の腕セクト》は体の良い門番扱いできそうだ。